

THE KEIO SPIRIT * SPORTS

慶應Spirit と スポーツ

数多くの近代的教育システムを日本で初めて導入した慶應義塾ですが、体育教育もその一つ。福澤諭吉は義塾の教育を書を読むだけの座学にとどめることなく、心身の健康も重視。わが国における体育教育・スポーツ奨励の先覚者である福澤の思いは、時代とともにカタチを変えて受け継がれ、現在の慶應義塾にも息づいています。

創立当初から 体育教育を重視していた慶應義塾

福澤は近代的な学校教育における体育の重要性をいち早く認め、代表的著作『西洋事情』の中で「四肢を運動し、苦学の鬱閉を散じ身体の健康を保つ」と、西洋の学校で取り組まれている体育教育を紹介しました。1868（明治元）年、三田移転前の新銭座時代の規則として「ジムナスチックの法」と名付けた西洋流の体育思想を導入。「ジムナスチックの法に従い種々の戯いたし、勉て身体を運動すべし」と定められ、「体育教育」を教育の根本に据えました。明治期の三田キャンパスの絵図を見ると、そうした体育教育の実践に使われたと考えられる遊具が運動場に描かれていて興味深いものがあります。

また、三田移転後には柔術、剣術、野球、端艇、弓術などの運動部が次々

OI
慶應義塾
体育教育の
理念



明治期の三田キャンパスの絵図。敷地上方に「運動場」の文字とともにブランコ、鉄棒などの遊具が描かれている
写真提供：三田メディアセンター

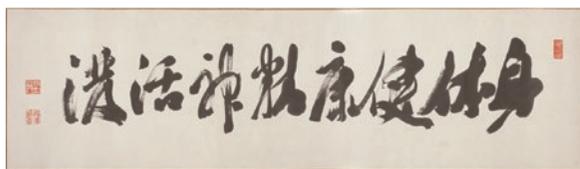
に生まれ、1892（明治25）年にそれらを統合する「慶應義塾体育会」が設立されました。その後、慶應義塾がラグビーやホッケーなどのスポーツをわが国でいち早く導入・紹介し、その普及に努めたのも福澤の体育教育への思いが結実したものといえるでしょう。

**福澤の思想を受け継ぐ
初等教育における教育理念**

福澤は『福翁百話』の中で小児教育のあり方に言及し、「兎に角に身体は人間第一の宝」だから、「先づ獸身を成して後に人心を養へ」と説いています。

幼少期にまず健全な身体を育成することを重視するこの教育理念は、現在に至るまで慶應義塾の一貫教育校で大切にされてきました。例えば今日の幼稚舎でも福澤が遺した書『身体健康精神活澆』とともに重要な教育方針の一つとなっています。福澤に初代幼稚舎長の重責を託された和田義郎は人格に優れ、柔術の秀でた人物でした。和田は自らが児童への柔道指南を担当することで福澤の思いに応えたと伝えられています。

そして、2013年に開設された横浜初等部では、海の学校、山の学校、スキー教室のほか、登山など体を動かす体験学習プログラムが充実しています。体育の授業は天然芝のグラウンドではだしを基本に行っていることも「先づ獸身を成して……」という福澤の思いを受け継ぐ取り組み



福澤による『身体健康精神活澆』の書
写真提供：三田メディアセンター

みです。
**塾生がスポーツに親しむ機会を
提供する体育研究所**

現在、慶應義塾大学の体育教育を担っているのが、1961（昭和36）年に日吉キャンパスに設立された体育研究所です。同研究所は「教育」「研究」「スポーツ振興」の3つの理念の下に「未来を切り拓くための行動力に溢れた塾生」の育成を目指した多彩な活動を展開しています。

SFC以外のキャンパスで開講されている保健体育科目は全て体育研究所によるものです。1990年代初め、必修科目だった大学の保健体育科目が選択科目に変わりました。他大学で保健体育科目の削減などが行われる中、慶應義塾大学は逆に科目を充実させました。それが現在「ウィークリースポーツ（体育実技A）」「シーズンスポーツ（体育実技B）」として開講されている実技科目です。1〜4年生までの塾生が履修可能で、塾生のニーズに合わせた多様なスポーツが体験できるこの実技科目もまた福澤の思いを受け継ぐ取り組みといえるでしょう。

慶應義塾の体育教育を支える体育研究所

体育研究所 所長

教授

石手 靖

体育研究所

准教授

鳥海 崇

体育研究所

専任講師

永田直也

体育研究所

専任講師

福士徳文

「**身体健康精神活潑**」をモットーに
多彩で充実した体育科目を開講

「慶應義塾の体育教育の根幹を担いながら、体育研究所自体は意外とその存在が塾生に知られていない組織かもしれません」と話すのは、現在体育研究所所長を務める石手靖教授。SFC



体育研究所（日吉キャンパス）

を除く日吉・三田両キャンパスで行われる体育科目は全て体育研究所が担っており、そのほか体育・スポーツ科学に関する「研究」とスポーツイベントやアスリート等の講演会開催など慶應義塾における「スポーツ振興」を推進する役割があります。体育教育の根幹をいわば縁の下の力持ちとして支える体育研究所スタッフに、塾生と体育教育の関わりを中心に話を聞きました。体育研究所と塾生のもっとも密接な

関わりは体育科目の開講です。日吉・三田キャンパスで開講されている体育科目はなんと40種目以上もあり、日本の大学では有数の充実ぶり。1993年度以降、体育科目は必修ではなく選択科目（SFCは必修）となっており、体育教育の意義が深まったと石手所長は話します。「実際に受講された方ならすぐ分かると思いますが、中高までの体育の授業と慶應義塾で開講している体育科目は、体育に対する基本的な考え方が異なります」

必修だから強制的にやらされる体育ではなく、一人一人興味がある種目を自主的に選択し、楽しみながら取り組んで自分の身体や健康にあらためて目を向けるようにしてもらうことが体育科目の目標。そのためヨガ&ピラティスやクライミングなど人気種目も積極的に取り入れ、一方で必ずしも履修者が多くない武道系の種目も大切にしています。そして全ての科目が、その競



水泳の授業風景（2019年撮影）

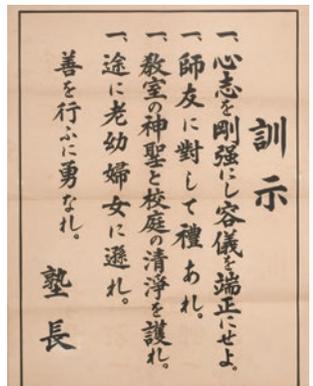
技のエキスパートを講師にしていることも慶應義塾の体育科目の大きな特色です。「それは慶應義塾体育会やスポーツ界で活躍する塾員の協力があってこそのこと」と石手所長は強調します。ちなみに体育科目担当教員のおよそ3分の1は塾員の競技者だそうです。教員による授業紹介動画もWebサイトに紹介されています（<https://ipehckei.o.ac.jp/2021.subjects#h-syunoku>）。

「福翁自伝」にまず獣身を成してのちに人心を養うという言葉があります。これはまだ自我が十分に育つ前の幼少期を踏まえた体育教育の理念です。すでに“人心”を備えた大学生に向

けて、私たちは福澤諭吉が遺した墨書『身体健康精神活潑』の理念、すなわち活発な知的活動の前提として心身の健康を保つことを目的とした科目開設やカリキュラム作りを行っています。体育科目には、受験勉強で運動不足になった塾生が心身ともにリフレッシュして各学部でしっかりと学問に取り組んでもらい、健康な心と身体で社会に巣立ってほしいという願いが込められています」（石手所長）

水難事故から命を守るための水泳技術「塾生皆泳」の伝統は今も生きている

鳥海崇准教授は体育実技科目「水泳」「水球」を担当していますが、伝統的に水泳教育に力を注いできたことも慶應義塾の体育教育の特色の一つだと言えます。これは1933年に塾長に就任した小泉信三が始めた「塾生皆泳」の奨励に端を発しています。その理念は「泳ぐ技能を身につけることが、人として備えるべき重要な素養のひとつである」。これは水難事故などで自分の身を守るだけでなく、溺れる人を救助できる水泳技術の向上を目指すものでした。小泉はタイタニック号沈没



体育研究所に掲げられた小泉信三の訓示

（1912年）で犠牲者を出した教訓からハーバード大学で行われていた水泳指導を参考にしたと言われています。

日吉の屋外プールが完成した翌年の1961年から90年代前半まで、塾生全員が泳力テストを受けて50mを泳ぎ切れなかった者は選択科目として「水泳」を履修しなければなりません。

「競技水泳ではなく、命を守るための水泳技術。大きな海難事故が続いた1960年代、わが国では広く水泳教育が見直されることになりましたが、慶應義塾の『塾生皆泳』はその先鞭をつけた形となりました」（鳥海准教授）

例年、河川や海などでの水難事故で多くの方が亡くなっています。2020年度以降、新型コロナウイルス感染拡大によって水泳授業が中止となっている小・中学校も少なくありません。

台風などの水難が増えていた昨今にも関わらず、生徒が水の安全について学ぶ機会が減っているのです。そのため体育研究所では鳥海准教授が幼稚園教諭らとともに、映像を見るだけで水難事故防止について学べる「安全水泳教育プログラム」の開発も行っています。

コロナ禍、そして東京2020…… 体育研究所の試練とチャレンジ

コロナ禍によって2020年度の春学期は体育実技科目の休講を余儀なくされました。その間、体育研究所では慶應義塾としての感染予防ガイドラインを策定するとともに、各競技団体の感染予防ガイドラインを徹底調査。二重のガイドラインによって万全の感染予防対策を敷いた上で秋学期から実技科目を再開させることができました。

「実技科目の再開がうまくいったのは塾生たちがきちんと感染対策に協力してくれたおかげ」と話すのは学習指導主任を務める永田直也専任講師。「秋学期の段階ではまだ学部の講義もオンライン授業が中心でしたが、体育科目は、キャンパスで行っていました。そのためなかなか大学の友人とも会えず

に悶々と過ごしていた塾生たちはこぞって体育科目を履修したため、従来ならすんなり履修できた種目まで抽選での履修になってしまいました」（永田専任講師）

コロナ禍によって多くの塾生があらためて多彩な体育実技科目に目を向けました。福士徳文専任講師は「自分でやってみたい種目を選ぶわけですが、塾生には未体験の種目にもチャレンジしてみたいと思います。新しい競技を経験することで自分の中にある新しい可能性を目覚めさせることができるとの出会いもあるでしょう」と話します。

研究所理念の一つである「スポーツ振興」の一環として、東京2020招致が決まった際に「KEIO 2020 Project」を立ち上げました。当初は日吉キャンパスが英国代表チームのキャンプ地となることもあり、塾生たちに東京2020の思い出を作ってもらおう企画などを構想していました。しかし、コロナ禍によって東京2020が1年延期となり、無観客開催となったことから、英国事前キャンプのサポートを中心とした学生によるボランティア団体

として活動しました。実は日吉キャンパスには今も英国代表チームが残した痕跡があちこちに残っていますので、それを探してみるのも面白いかもしれません。

体育研究所では、コロナ禍の中で、ステイホームの運動不足を解消するための動画配信「うちでも身体を動かそうプロジェクト」や地域住民も参加できる「はじめてのヨガ」や「ピラティス」の公開講座などの新しい試みにも取り組みました。

「コロナ禍は私たちがより良く生きていくための健康と身体的重要性を再認識させてくれました。今後、体育研究所では従来から深く連携する体育会に加えて、スポーツ医学研究センターや保健管理センターと協力しながら、『未来を切り拓くための行動力に溢れた塾生を育てる』基本方針の実現のためにチャレンジを続けていきたいと考えられています」（石手所長）



「体育withコロナ」パンフレット

塾生を育てる基本方針の実現のためにチャレンジを続けていきたいと考えられています」（石手所長）

リサイクル3Dプリンティングによる東京2020表彰台

環境情報学部 教授 田中浩也 たなかひろや

東京2020組織委員会から打診を受けたのは2019年の夏のことでした。エンブレム制作者・野老朝雄たのらあさおさんがデザインした表彰台を、全国各地から回収した使用済み洗剤容器をリサイクルした材料を使って、合計98台製造してほしい、という依頼でした。当時、私の研究室では、2013年から始まった文部科学省COIプログラムの最終段階として、大型3Dプリンティングの技術を社会に発信できる方法を探していました。オリパラの重要アイテムを製作する過程では、何段階にもわたる細かなチェックと確認が必要です。設計の変更、仕様の修正指示も頻りに飛び交う予想不可能性の高いプロジェクトでは、「最初のひとつ」をつくるのに時間がかかるため、やりなおしの利かない金型製造で対応するのは根本的に難しく、逆にデータをもとに何度でも修正できる3Dプリンティングの可能性が活きたと考えられたのです。

研究室では、使用済みプラスチックの材料品質や3Dプリント量産するためのパス設計を進めながら、複数の企業と連携して生産体制を整え、プロジェクト全体を統率していきました。研究室の卒業生である平本知樹さん、特任助教の湯浅亮平さん、当時学部学生だった江口壮哉さんに私という多世代メンバーで連携して臨め

たことで、困難な状況を何度も切り抜けることができました。そしてギリギリ間に合うタイミングでなんとか納品が完了したと思われた2020年春、新型コロナウイルスの影響で大会は急遽1年延期になり、表彰台は倉庫で1年間保管されることになりました。

しかし延期決定の直後から、我々はまた新たなプロジェクトを開始します。表彰台製作過程で失敗した材料や、余った材料を集め、コロナ対策のための「フェイスシールド」を3Dプリンタで製作し、全国各地の聴覚特別支援学校に



東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会表彰台の検討模型



田中浩也教授(中)、湯浅亮平特任助教(右)、大学院政策・メディア研究科修士1年 江口壮哉君(左)(それぞれ、表彰台の一部となるキューブ、プラスチック材料〈ベレット〉、ミニチュア模型を手にしている)

計1万個を配布したのです。もともと我々は、「捨てられるはずだった洗剤容器」をリサイクルしてつくった表彰台を、大会後もまた次の別の形にリサイクルして使い続ける、循環型デザインのアイディアを温めていました。コロナ禍の中、この可能性を実証しながら、2020年秋にはKGR「環境デザイン&デジタルマニファクチャリング創造センター」設立に至りました。昨年無事開催された東京2020では、フランス、カナダ、ドイツなどのメディアで我々の研究を世界に発信いただきました。そしていま、科学技術振興機構・共創の場形成支援プログラム(OI-NEX)では「デジタル駆動超資源循環参加型社会」と題した新たな研究プロジェクトを開始したばかりです。3Dプリントから生まれるリサイクルの新たな可能性と価値を、「東京2020」という特殊なイベントからできた一回性の出来事に終わらせるのではなく、「レガシー」として、社会に残り持続するものへとさらに実装を進めることこそが、我々の責任であり次の目標です。選手の皆さんと同じように、我々も常に世界の舞台を意識し、毎日の研鑽を積み重ねていきたいと思います。